

『今月の天候と農作業』

通巻第5535号
9月号
平成23年9月2日発行
宮崎県
宮崎地方気象台



【九州南部1か月予報】

向こう1か月の気温、降水量及び日照時間の各階級の予想される確率は次の通りです。

【確率(%)】

要素	予報対象地域	低い (少ない)	平年並	高い (多い)
気温	九州南部	20	30	50
降水量	九州南部	40	30	30
日照時間	九州南部	20	40	40

【概要】

天気は数日の周期で変わり、平年に比べて晴れの日が多い見込みです。

2週目を中心に、気温が平年に比べてかなり高くなる可能性があります。

向こう1か月の平均気温は、高い確率50%です。日照時間は、平年並または多い確率ともに40%です。

<1週目の予報> 9月3日(土)～9月9日(金)

天気は、高気圧に覆われて晴れの日が多いでしょう。

(詳しくは週間天気予報をご利用ください。)

気温は、九州南部で平年並または高い確率ともに40%、奄美地方で高い確率50%です。

<2週目の予報> 9月10日(土)～9月16日(金)

天気は、高気圧に覆われやすく、平年に比べて晴れの日が多いでしょう。

気温は、九州南部で高い確率50%

<3週目から4週目の予報> 9月17日(土)～9月30日(金)

天気は、数日の周期で変わるでしょう。

気温は、平年並または高い確率ともに40%です。

<次回の発表予定等>

1か月予報：毎週金曜日 14時30分 次回は9月9日

3か月予報：9月22日(木曜日) 14時

寒候期予報：9月22日(木曜日) 14時

普通作物

◆ 普通期水稻

1 水管理

「ヒノヒカリ」は乳熟期にあります。根の活力を保つために間断かん水を行いましょ。晩生種の「まいひかり」は、出穂期前後にありますので湛水状態を保ちます。

玄米の充実と品質向上のため、収穫5日前までは間断かん水を続け、極端な早期落水を行わないようにしましょう。

出穂期以降の台風は、倒伏や白穂の発生など甚大な被害を及ぼします。被害の軽減を図るために日頃から気象情報に注意し、畦畔や水路の整備、深水管理等、的確な事前事後対策で備えましょ。

2 病虫害の防除

今年普通期水稻でもいもち病の注意報が発令されるなど、県下全域で葉いもちが多く発生しています。今後、気候的にも穂いもちが発生しやすい条件が揃ってきますので、遅れないよう防除ましょ。特に山間地の常発地や葉色の濃い水田、葉いもちが上位葉まで見られた水田では、注意が必要です。カメムシによる斑点米での品質低下は毎年多く発生しています。被害を抑えるには穂揃期とその後7～10日後の2回防除を行い、それ以降も発生に注意まします。トビイロウンカは急激な増殖により坪枯れを起こましますので、株元まで良く観察ましょ。農薬散布については、地域の防除基準等を遵守し、周辺に十分注意を払い危被害防止に努めましょ。

◆ 大豆

開花期から幼莢期となるこの時期は紫斑病、カメムシの防除時期です。また、ハスモンヨトウの発生はすでに多く見られていますが、老齡幼虫になると薬剤防除の効果が劣るので早めに行いまします。ほ場を観察し孵化後間もない幼虫が食害した際に発生する白く透けた葉を見つけたら、幼虫が周囲に広がる前に処分することが大切です。

台風等で多雨が予想される場合は、排水対策を十分行いましょう。

◆ そば

そばは干ばつに強い作物ですが、湿害には弱く降雨後に長時間帯水や冠水すると生育不良や立ち枯れ等を起こしますので、排水溝等を設け徹底した排水対策を行いましょう。

(鎌田 博人)

果菜類

◆ 共通事項

施設野菜では、きゅうり、ピーマン、トマトなどの定植が始まります。育苗期の後半は、鉢ずらしを行ない、がっちりした苗に仕上げます。鉢ずらし後は乾燥しやすいので、かん水不足に注意します。

また、これらの苗は適期に定植することが重要です。台風や降雨の多い時期となるため、ハウスの定植準備は計画的に余裕をもって行います。

定植前のかん水は、定植の5～7日前にかん水チューブを利用し、畦全体が湿るように十分行います。定植前には、根が深く伸長するよう植え穴に十分かん水を行い、定植後は活着促進を図るため株元を中心にかん水することが重要となります。なお、定植前のかん水量が不足していると、雨の少ない年には水管理に苦勞する上に、根張りが不十分となり、生育や収量に大きく影響します。

◆ ピーマン

接木栽培のピーマンは、自根栽培に比べて草勢がやや弱くなる傾向がありますので、若苗での定植を行うとともに、かん水についても定植後から収穫開始時期までかん水量を3～4割増やすなど、草勢を強めに保つことが必要となります。

◆いちご

さがほのかは、花芽分化に対する窒素濃度や苗令等の影響が少なく、花芽分化が早く揃いが良いのが特徴です。

ポット苗の花芽分化期は9月10日頃なので、その2～3日前から検鏡を行います。花芽の確認後、9月中旬以降に定植します。なお、採苗が早く育苗期間の長い苗から順番に行い、炭疽病等の恐れのある苗は除去します。

(郡司 孝幸)

葉茎菜類及びいも類

9月はキャベツ、はくさい、レタスなどの葉菜類やだいこん、水田ごぼうなどの根菜類のは種や定植期となります。水はけの良い、地力の高いほ場を選び、植え付け時に適度なかん水で初期生育を促すことが重要です。

また、病害虫では生育初期にネキリムシ等鱗翅目害虫が多く見られ、雑草の発生も多いので除草対策は重要になります。

◆にんじん

にんじんは間引きの時期を迎えます。株間は8センチ程度を目安に年内出荷はやや広めに、年明け出荷はやや狭くして有効株数を確保し収量アップを図ります。干ばつによる発芽不良や雨による流失で欠株が多い場合は、まき直しを行います。地域により差はありますが、今月20日頃がは種の限界となります。

◆じゃがいも

秋作の植え付け時期となります。種いもは10センチ当たり200グラムが必要です。通常、60～80センチのいもを縦割りにして使います。切断は植え付けの2日前に行い、日陰で切断面を乾かします。植え付けは切断面を下にし、8～10センチの覆土をします。また、マルチ栽培は植え付け時の地温が高すぎて欠株が多く生じやすいので、植え付け時期を遅らすなどの注意が必要です。

◆ 食用かんしょ

普通堀の収穫期です。生育日数が130日以上になると、いもの形や皮色が悪くなります。鱗翅目幼虫（ハスモンヨトウ、ナカジロシタバ等）が多発しやすいので、収穫予定日を考慮して農薬防除を行いましょう。

（河野 健次郎）

果樹

1 常緑果樹

◆ 温州みかん

今年は平年よりも開花が遅かったため、クエン酸含量が高い傾向にあります。クエン酸が高いと収穫時期が遅くなり単価が下がりますので、平年よりもクエン酸が高めの園地では、減酸促進のため、出荷直前まで日没後の葉水を実施しましょう。特にクエン酸が高い園地では、かん水を行いましょう。ただし、過度のかん水は糖度低下につながるため、糖度が低い場合はかん水は控えましょう。

収穫は、樹上選果を行いながら、着色や果汁成分など、地域の基準に基づいた出荷を行いましょう。

収穫後は、樹勢回復のための施肥やかん水、葉面散布が必要となります。収穫が早い園では、秋期の高温の影響で、収穫後に秋枝が発生し、翌年の着花に悪影響を及ぼす事があります。9月中旬までに収穫を終える園地では、10月以降、秋枝が発芽しなくなった時点でマルチの除去やかん水などを実施しましょう。

◆ 完熟きんかん

今年は7月上旬に開花した花が、多くの地域で結果しています。良好な肥大を確保するため、9月末までに摘果を終了しましょう。

◆ マンゴー

9月になると、日射量は真夏の4分の3程度になります。寒冷紗等により遮光を行っている場合には、日照不足によって枝の緑化が遅れ、花芽分化に悪影響を及ぼす事があるので、こまめな管理で十分な日照を確保しましょう。また、

枝が多すぎるのも緑化を遅らせる要因の一つです。混みすぎた枝は早めに整理して、日当たりを良くし、十分なかん水を行うことで、樹勢の低下を防止しましょう。枝の緑化が明らかに遅れている園では、外気温が20度以下になる9月下旬から加温を行うことで、緑化を早めることができます。

2 落葉果樹

◆くり

ほとんどの品種が収穫時期を迎えます。

収穫・出荷に当たっては、早朝に収穫することで、品温を低く保ち鮮度保持を図りましょう。また、家庭選別を徹底し、実炭疽病や果実害虫の被害果の混入を防止しましょう。

3 果樹全般

◆土壌診断

不適正な土壌は、根の生育不良を引き起こし、収穫後の樹勢回復を阻害します。収穫後は土壌診断を実施し、適正な施肥や土壌改良を心がけましょう。

(山口和典)

花き

◆秋ギク

「神馬2号」、「神馬66-4」の10月出荷作型の再電照は総苞りん片形成後期から4日間実施します。目安として消灯後12～14日後ですが、地域や当年の気候により変動がありますので、農業改良普及センターまたはJAにおいて「花芽分化検鏡」を行った上で実施してください。

直挿しする穂は、低温伸張性を高め節間伸長や生育の揃いを良くするために2～4度で穂冷蔵を行います。「神馬」系統は穂冷蔵を長期間実施すると、開花遅延が発生する恐れがありますので、冷蔵期間は3週間程度にしましょう。

「神馬66-4」は、高温の影響を受けると従来の「神

馬系統」よりも腋芽が出にくい特性があります。9月以降も残暑が続きますので、必要に応じてBA剤の散布を行うとともに、親株ほ場はできるだけ涼しくなるよう管理してください。

◆スイートピー

冷蔵が終了した種子は、活着不良を避けるために遅くとも出庫後3日までは植え付けましょう。また植え付けから1週間は、乾燥しないように綿密な水管理を行ない、その後は徐々にかん水間隔を広げて根の張りを良くしてください。1ヶ月程度は、ベッド全体が十分湿るようなかん水を行ってください。

植え付け時期の遮光は地温の上昇を抑えるため植え付け前から実施し、植え付け後7～10日は寒冷紗で終日遮光し、その後は天候に応じた遮光を行ってください。長期の遮光は軟弱徒長となりますので注意します。植え付け直後と摘心時には殺菌剤をかん注し、立ち枯れ病を予防してください。日中は循環扇等を利用し施設内の環境改善に努めるほか、高温時はミスト等で気温低下を図るのも有効です。

◆デルフィニウム

沿海地域の年内出荷作型の定植期になります。定植時にハウス内温度が高いと早期抽だいするので、定植前に寒冷紗等で遮光するとともに十分にかん水を行ってください。

中山間地域で8月に定植した作型では伸長時期から抽だい時期になります。発蕾までにボリュームをつけることが大切ですので、定植から抽だい後2週間ぐらいまでは定期的に液肥を施用します。また、必要に応じてカルシウム資材の葉面散布を行ってください。

いずれの作型でもうどんこ病の防除は徹底してください。

◆ホオズキ

白絹病やその他の立ち枯れ病等が発生したほ場では、できる限り残渣をほ場外に持ち出して焼却し、ほ場に残った残渣は気温が高い間に石灰窒素等を散布し、腐熟を進め来作に備えましょう。

(中村 広)

畜産・飼料作物

今月に入っても残暑が続きますので、家畜への暑熱対策を引き続き実施しましょう。

1日の寒暖差が大きくなりますので、夏バテ気味で体力の低下した家畜は、繁殖成績や肥育成績の悪化が予想されます。十分な観察による早期治療や良質な飼料を回数を増やして給与するなど、家畜の健康状態を早めに改善させましょう。

9月から10月にかけて温度、湿度等ハエの発生しやすい条件が揃う時期です。次の対策を行って秋バエの発生を防ぎましょう。

①発生源対策として畜舎内の清掃により、ハエが産卵する新鮮な糞を取り除きます。

また、たい肥は温度を上げるために、適正な水分調整とこまめな切り返しに努めましょう。

②ハエは幼虫のうちに駆除するのが効果的です。発生源に昆虫成長抑制剤などの殺虫剤を定期的に散布しましょう。

③ハエが大発生したら、成虫用殺虫剤を家畜や鶏卵に直接かからないよう畜舎内に空中噴霧し、次に食毒作用のある殺虫剤をハエがよく止まる場所に塗布しましょう。

今月から秋冬作の飼料作物の作付けが始まりますが、毎年、未熟たい肥の過剰施肥により収穫時に硝酸塩含量の多いイタリアン等が確認されます。牛の硝酸塩中毒を防ぐために、散布前のたい肥の成分分析と適正な施肥方法について近くの農業改良普及センターに相談しましょう。

最後に、毎月20日は「県内一斉消毒の日」です。畜舎内の消毒、踏み込み消毒槽の設置、畜舎周辺への石灰散布など衛生管理を徹底させ伝染病の侵入から農場を守りましょう。

(小坂昭三)

◆ 茶

1 秋肥の施用

今年各茶期を通じ、干ばつ、低温、多雨による肥効低下がみられ、また、被覆の実施と収量確保による地力や樹勢の低下が懸念されています。

このため、深耕による土づくりに取り組むとともに、秋肥として、有機質主体の肥料を施用します。肥効率を考慮し、散布幅を広く施用した後、畝間を軽く攪拌しましょう。

施肥は地区の施肥基準に準じ、山間地や幼木園、寒の強いところでは8月末までに、平坦地は9月中旬頃を目途に作業を終わらせましょう。

施肥が遅れると、干ばつに伴う肥効の遅れを助長することになり、また、暖冬と重なると茶樹の耐寒性が低下し、秋冬期の急激な低温による寒害（幹割れ、芽つぶれ等）を受けやすくなります。適期施肥とともに乾燥時の散水や液肥散布が効果的です。

2 害虫の防除

第3世代のクワシロカイガラムシ幼虫が見られる茶園では、8月下旬から9月上旬が防除時期になります。幼虫のふ化状況を確認し、散布は専用ノズルを用いて枝幹部に確実にかかるよう散布してください。

秋芽が硬化していない茶園では、秋雨等の連続降雨や朝晩の露により濡れ時間が長くなると炭疽病、もち病が多発します。対策のための農薬の利用は1葉期までに保護剤、3葉期に治療効果のある薬剤を体系的に使い防除します。同時に多発気味のウンカ、スリップス、ダニ等の吸汁性害虫やハマキ類も防除しましょう。

良質茶生産のため、施肥・防除管理を徹底し、来年の親葉になる秋芽と越冬芽の充実を図りましょう。

（岩切健二）

◆しいたけ

1 原基づくり

9月から10月は、菌糸の塊で肥大生長して、しいたけになる原基の形成が盛んな時期です。原基の数がしいたけの発生量に大きく影響しますので、原基の形成促進のため、光の確保に加え、十分に散水を行うなどほだ木の水分補給に努めましょう。特に古ほだ木は、天地返しやほだ回しを併せて行うとより効果的です。

2 ほだ場の準備

秋以降のほだ起こしに備えて、ほだ場の選定と整理が必要です。ほだ場には、南～東南斜面の常緑広葉樹林や針広混交林、また、風当たりが弱く湿気が多いところなどが適しています。スギやヒノキ林のほだ場では、林内が暗くなりがちなので、間伐や枝打ちを行い林内を明るくし、光や降雨の入りやすい環境にするとともに、風の強い場所では防風垣を設置するなど環境改善に努めましょう。さらに、従来からのほだ場を使用する場合は、害菌による被害木や古ほだ木を撤去しましょう。

(田中 貴司)

◆葉たばこ

9月上旬から南九州リーフセンターにおいて、葉たばこの通常期買入が開始されました。

今月の作業は、出荷までの出荷規格確認と、来年作に向けた準備が主な作業となります。

1 出荷前には必ず最終確認として、異物・異臭の確認、土砂付着や腐れ・枯れの手入不足がないか包全体をチェックしましょう。本年作は塩素を吸収したグレー葉が多いため吸湿による品質低下に注意し、普通系に色損系（塩素グレー）が混入している場合はピッキングを行いましょう。

貯蔵害虫については、成虫や食害痕、排泄物がないかチェックを行いましょう。発生を確認した場合は、速やかに耕作組合へ連絡し適切な処置を行ってください。

2 病害の耕種的防除のためにも夏期深耕を行い菌密度低減と土作りに努めましょう。

3 1反当り1, 200kgの良質堆肥使用へ向けて、堆

肥の材料を十分に確保しましょう。また、未熟堆肥投入を避けるためにも定期的に切返しを行い、腐熟促進を図りましょう。

(中矢恭輔)

内容の詳細について

9月の天候と農作業の詳細内容について。執筆は県営農支援課及び環境森林課、日本たばこ産業南九州原料本部が担当しています。各作物の病害虫の防除対策、気象災害の事前事後対策等の詳細は最寄りの支庁・農林振興局（農業改良普及センター）へ

「今月の天候と農作業」はホームページにも掲載しています。

(<http://mawi.sakura.ne.jp/>)

なになに農業アラカルト

農作業事故を減らそう！

農作業事故は、直接作業者の身体や生命にかかわるだけでなく、事故の発生によって農業経営や農家生活全般に大きな影響を及ぼすことから、事故を未然に防止し、農作業安全に努めることは極めて重要なことです。

全国では、毎年、約400件の農作業死亡事故が発生しており、宮崎県でも、毎年、10人前後の尊い命が失われています。

1 県内の農作業事故の傾向

県では毎年、農作業安全推進対策の一環として、農作業事故の実態調査を行っています。

農作業事故の発生件数は、昭和60年の669件をピークに年々減少し、近年は350件前後で推移しています。

農作業事故の傾向としては、事故者の高齢化が顕著になっています。昭和57年にはわずか10.0%であった60歳以上の事故者の割合は、平成21年には58.6%となっており、また、女性の割合は全体の42.6%を占めています。

過去5年間の農業機械による事故の内訳は、乗用型トラクターによるものが17.3%、農用トラックが16.4%、草刈機が16.2%と上位を占め、これらで農業機械による事故の約半数を占めます。農業機械以外では畜舎・作業舎での転倒などの事故や家畜による事故が多く発生しています。また、月別では農繁期の5～6月、9～10月が農耕用機械の使用頻度も高く、事故の発生も多くなっています。

2 農作業の安全対策

農作業による事故発生の主な要因は、①作業者の体調不良や無理な作業計画による人的要因、②機械の整備不十分等による機械的要因、③天候不良や農地農道の整備不良等による環境的要因があげられます。これらの様々な条件が積み重なり、重大事故につながります。1つの重大事故の裏側には、同じ原因で29件の軽い事故と、300件のヒヤリ体験が発生していると言われていています。日常の農作業

でヒヤッとした体験をしたら、その都度原因を振り返り、対策を講じることが、大事故の発生を防止するためのポイントです。

農作業に従事する際には、いつでも危険が隣り合わせにあることを認識して、常に農作業安全に心掛けることが重要です。

県では9月～10月を「秋の農作業安全運動」期間として、農作業事故防止に向けた啓発活動を実施しています。

特に事故が多くなる時期ですので、農作業安全に努めましょう。

(猪本 聡司)

みんなが待ってるよ 無事にカエろう

農作業事故防止の 9のポイント

その1

作業に適した
服装など
身支度を
整え
ましょう



その3

安全キャブフレームの
あるトラクターを
使用し、シート
ベルトの着用
を徹底し
ましょう



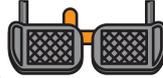
その2

点検は
安全作業の第一歩。
機械の日常点検、
定期点検は必ず行い
ましょう

その4

走行時は
路面状態や
障害物に
注意
しましょう

作業が終わったら
ほ場を出る前に
左右のブレーキを
連結しましょう



その6



こまめに休憩を
とりましょう

その9

「お疲れさま」
「おかえりなさい」の
あいさつを習慣に
しましょう

その8

複数人での
作業時には
合図したり、
声をかけ合っ
てお互いに安全を
確認しましょう

その7

ほ場退出時は、
作業機を下げ
て直角の向き
で退出しまし
ょう

向こう1か月間における農作物の主な病害虫の発生量と防除対策

農作物名	病害虫名	発生量	発生状況と防除対策
普通期水稻	穂いもち ※※ 紋枯病	多 やや少	葉いもちの発生状況は、発生面積率、程度ともに高い状況にあり注意報を発表しています。 8月の紋枯病は発生はやや少ですが、9月に入り発生が拡大しています。穂ばらみ期以降は稲体の抵抗性が弱まり、紋枯病が上位葉鞘へ進展しやすいので、発生程度の高いほ場は注意が必要です。
	トビイロウカ ※ (秋ウカ) 斑点米カメムシ類	並 やや少	トビイロウカは少ない発生でも増殖力が高いので、ほ場全体の発生状況の把握に努めます。成虫・幼虫ともに株元に生息しているので、株元まで十分農薬が到達するように防除します。 斑点米カメムシ類は、穂揃期とその7~10日後の2回防除が基本です。残存虫が多い場合は収穫前使用日数等に注意して追加防除します。
大豆及び野菜類	ハスモンヨトウ等チョウ目 (鱗翅目)害虫	やや多	中齢以降の幼虫に対しては薬剤が効きにくくなりますので、早期発見に努め若齢幼虫期に防除します。施設栽培では成虫飛来を防止するため、施設開口部に防虫ネットを設置し、苗に卵塊や幼虫がいないことを確認して定植します。
施設果菜類	ウイルス媒介虫 (アブラムシ類、アザミウマ類等)	—	ウイルス病は生育初期に感染すると大きな被害をもたらします。アブラムシ類やアザミウマ類などは種々のウイルス病を媒介しますので、施設開口部への防虫ネット設置や定植時の粒剤施用などの防除を徹底します。
	タバココナジラミ類	—	県内ほぼ全域で、各種薬剤に対して感受性の低い(薬剤の効きにくい)バイトタイプQが、優先して発生していることが確認されています。薬剤のみでは防除が困難ですので、防虫ネットや粘着板等を組み合わせた総合的な防除対策に努めましょう。
	シキイロアザミウマ	—	本虫によって媒介されるキュウリ黄化えそ病(MYSV)が、一部地域で確認され、徐々に拡大傾向にあることから注意が必要です。本病と疑われる症状が発生した場合は、西臼杵支庁・農林振興局(農業改良普及センター)または病害虫防除・肥料検査センターまで連絡ください。
促成イチゴ	炭疽病 ※※、萎黄病等	—	罹病苗の持ち込みは、本ほ内での感染源となるため健全苗のみ定植します。苗床で発病した苗に隣接している苗(半径3ポット程度)は、感染苗と見なし廃棄します。 近年、苗からの持ち込みによる「うどんこ病」や「ハダニ」の発生が多く見られるので、定植前に防除を徹底します。
果樹全般	果樹カメムシ類	—	うんしゅうみかんでは、着色期の加害は落果を生じやすいので、園内外を見回り、早期発見・早期防除に努めます。
カンキツ類 (露地栽培)	かいよう病 黒点病	やや多 やや多	かいよう病は、台風等による枝葉の損傷等により発病が助長されます。薬剤は、事後より事前に予防的に散布する方が効果的です。
	カンザワハダニ チャノキアザミウマ	並 やや多	カンザワハダニは、平年並の発生ですが、発生初期(1葉あたり0.5~1頭)に防除を行います。
茶	炭疽病 ※ もち病 輪斑病	多 多 並	炭疽病は、秋芽の生育期に降雨が続く場合には、生育初期から7日間隔で2~3回防除します。輪斑病は新梢枯死症の原因となりますので、輪斑病の多発ほ場では秋芽の萌芽期から2葉期に防除します。
	カンザワハダニ チャノコカクモンハマキ チャハマキ チャノボカ チャノキアザミウマ チャノミドリヒメコハ クワシロカイガラムシ	並 並 並 多 やや多 多 並	カンザワハダニは、低密度での防除に努めるとともに、薬剤抵抗性を避けるため、系統の異なる薬剤をローテーションで使用します。 チャノキアザミウマのこの時期の発生は、卵・幼虫・蛹・成虫が混在し、卵と蛹には農薬がかかりにくく防除効果があがらないので、残効性の長い農薬か1週間間隔での連続散布を行います。 チャノミドリヒメコハの発生が多い状況ですが、チャノキアザミウマとの同時防除が可能です。
<p>1) 「発生量」は、過去10年間の発生量と比較して、今後の発生量がどの程度になるか予測したものです。 2) ※は防除情報、※※は注意報を発表中です。詳しくはホームページをご覧ください。病害虫防除・肥料検査センターホームページアドレスは、http://www.jpnp.ne.jp/miyazakiです。</p>			